

年間第24主日

福音朗読 マタイ 18・21-35

2023.9.17 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第一朗読ではシラ書という旧約聖書の中の一つの書物から朗読されました。ただ、このシラ書は教派によっては旧約聖書の書物の中に数えられていない。カトリック教会とか正教会では旧約聖書の中に入ってますけども、他の教派では入っていないことが多いわけです。ですから、例えば聖書をお買いになる場合には、良く教会で使われている新共同訳聖書でしたらば、旧約聖書続編付きっという文字が入っているやつにしないと、今日教会で聴いた聖書の箇所が自分の家の聖書には載ってないということになります。外国語だったら **Catholic Edition** にしないといけないわけですけども、その違いというのは、実はユダヤ教の人たちがある時期に、何が旧約聖書の書物として——彼らは旧約聖書って言いませんけども——聖書の書物として何が含まれるのかということの研究し直して、そして選択していったわけです。その中で、もともとのヘブライ語の写本が残っていない、当時の世界の共通語と言われているギリシャ語の翻訳だけしか残っていない書物は聖書としては取り除いていった——まあそういう単純な基準じゃないんですけど——聖書を研究しながら取り除いていったという経緯があって、そのユダヤ教の人たちの選択に足並みを揃えましょうという教派と、それはそれ、自分たちはキリスト信者たちが最初の時代から聖書として受け取ってきたものを全体として聖書として受け取っていくという立場と、二つに分かれているということになりますが、今日お話ししたいのはそのことと言うよりは、むしろユダヤ教の人たちが旧約聖書の書物に何が含まれていて何がそこに含まれていないのかということ判断していこうとしたのはいつか、ということなのです。

そういう研究をする余裕があるときではなかったわけです。イエス様が昇天された40年くらいあと、紀元70年にエルサレムの都がローマ軍によって完全に占領されて破壊されて、神殿も破壊される、国が滅亡する、という出来事があって、そのときなんですね。そのあと、エルサレムから避難した律法学者たちが、聖書のことをもう一回研究し直さなければ自分たちのアイデンティティーが失われるということで、紀元90年頃にそういうふうに、何が旧約聖書に含ま

れるのか——それだけじゃないんですけど——ユダヤ教としてのアイデンティティーを確立するという作業にとりかかったということなんです。

他国によって国が滅ぼされるというときに、それにどのように対処するのか、ローマ軍に対してどうするのかとかいうことではなくて、神様のみことば、更には、その中で今大変なときに自分たちを支えてくれるみことばを探すというようなことでもなく、もっと基礎的な、何が神のみことばとして自分たちが受け継ぐべきかということをもう一回見直したということなんです。

考えてみると、ユダヤ教では、もっとずうっと昔、バビロニアによって国が滅ぼされた、王様が殺されて、エルサレムが破壊されて、神殿が破壊されるということが紀元前6世紀頃に起った、そのときにもやっぱり神のみことばに立ち返る——そのときにはまだ書物として書かれた聖書はなかったので、昔から言い伝えられてきたことを順番に整えて、そして文字として聖書を書き始めたというのが、バビロニアによって国が滅ぼされた、そのときからなんだと言われていません。

そういう危機の時こそ、自分たちが何者なのかということの土台である神のみことばに、しかもその基本の基本、最初の時代はバビロニアに滅ぼされた紀元前6世紀のときには聖書の言葉を次に伝えていくことができるように書物に、文字にし始めた。また、イエス様の時代、エルサレムがローマ軍によって滅ぼされたときには、ユダヤ教の人たちは——その結論はカトリックの教会とは違っていましたけども——何が神のみことばなのかということをもう一回見直すという、そういう作業から取り掛かったわけです。もちろん、ローマに対して反乱を起こすとか、そういうようなことに出た人もいます。けれども、現代にいたるまで世界中のどこに居てもユダヤ教の人たちが存在してそのアイデンティティーを保っているというのは、都が失われた時代に神のみことばの研究からもう一回手を付けた、そういう人たちのおかげということができます。

これは国レベルの話ですが、危機の時こそ自分たちのアイデンティティーをもう一回確認し、そこから離れないようにするということは、わたしたち個人のレベルでも言えるのではないかと思います。今日の福音では、誰かが自分に対して罪を犯したときに、どうしたらいいですか、それに対してイエス様は、何回でも赦しなさいとお命じになる。その背後には、他の人の悪によってあなたの歩む方向が変わってはならない、あなた自身のアイデンティティーは他の人の悪に影響されてはならない、という根本的な神様の呼び掛けにイエス様の命をもつ

て呼ばれた者という歩み、それは何ものからも影響を受けて捻じ曲げられてはいけないんだっていう神様の恵みの宣言であると言うことができます。

ですから、自分は赦せるとか赦せないとか、あの人のやったことがひどいとか、そういうことではない。昔の時代のイスラエルの人たちが——考えてみればひどい話なんです、ずうっと外国から攻めて来て、国が盗られてしまう——バビロニアに対してもまたローマに対しても、自分たちとローマとかバビロニアの関係の中だけで出来事を捉えるのではなく、その出来事に遭ったときに、自分と神様の関係の中から外れないようにもう一回みことばを研究し直したというその心をわたしたちも持つ、そのように招かれているのではないかなと思います。誰かが自分に対して悪を行ったときこそ、その自分のアイデンティティーの危機でもある。その影響を受けるのか、それともそうではない神の恵みに留まるのか、というときです。

ですから、わたしたちもそういうときにやっぱり相手と自分——相手がしたことがどうか、それに対して自分の反応は無理もないことなんだとか——相手と自分の関係だけを見るのではなく、神様と自分の関係を見直して、自分とは何者なのか、そのことを失わないようにする、イエス様の命によって神の愛と慈しみを示す者になるように呼ばれた者である、その歩みが逸れないように、そこに戻って行くということが大切なのではないかなと思います。自分自身が何者であるかということさえ見失わなければ、周りにどんなことがあっても、どんな悪い人がいても、わたしたちはそこに打ち倒されるのではなく乗り越えて行ける、また、もしも御心ならばむしろ良い影響を与えて行くことができる、そういう恵みなんだということを思い起こしたいと思います。

今日も、ご聖体を通して、一人ひとりの中に神様との繋がり、みことばをいただいた者としての自分自身を思い起こします。共に捧げするこのミサを通して、一人ひとりがイエス様の命によって呼ばれた者なんだということをどんなときにも忘れることなく、今、この時点で完全でなくても、でもそこに向かって歩んでいるその方向性を見失わずに信仰の道を歩むことができますように、共に恵みを願い合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>